

第25回 河内長野市文化振興計画推進委員会 議事録

【日時】平成23年6月2日（木）午後7時30分～午後9時45分

【場所】市役所5階 501会議室

【出席者】

〈河内長野市文化振興計画推進委員会委員〉

谷 悟・千原 喜美・魚返 普子・川上 勝・小西 朋子・白井 春夫・寶楽 陸寛・
松村 千恵子・南 美鈴・山田 淳子

〈事務局（河内長野市教育委員会事務局ふるさと文化課）〉

尾谷・井上・東畑・廣中

〈オブザーバー（財団法人河内長野市文化振興財団）〉

萬木

【配布資料】

- ・第25回河内長野市文化振興計画推進委員会次第
- ・河内長野市文化振興計画推進委員会委員名簿
- ・資料1 河内長野市文化振興計画推進委員会設置規則
- ・資料2 河内長野市審議会等の設置、運営及び公開に関する指針
- ・資料3 河内長野市文化振興計画推進委員会会議の傍聴要領（案）
- ・資料4 第24回河内長野市文化振興計画推進委員会議事録
- ・文化振興計画概要版抜粋
- ・平成23年度 河内長野市文化振興財団 事業計画書
- ・ラブリーニュース
- ・ラブリーホール各種公演チラシ

以上

東畑主査

<事務局職員紹介>

尾谷部長

<委嘱状交付、挨拶>

東畑主査

<委員長・副委員長の選任>

谷委員長

設置場所は変わりましたが、引き続き委員長をさせていただくことになりました。私だけの力ではどうにもなりませんので、みなさんのご協力により形にしていきたいと思っています。よろしくお願いします。

千原副委員長

何か具体的なものを感じています。谷委員長について頑張っていきたいと思っています。

東畑主査

<出席状況の確認>

谷委員長

今後の会議の進め方と公開について市から説明いただきたい。

東畑主査

〈資料2参照〉「河内長野市審議会等の設置、運営及び公開等に関する指針」第5章第11項にある「会議の公開」に基づき河内長野市で行われている会議は原則公開となっている。また、第12項「公開又は非公開の決定」に「審議会等の会議の公開又は非公開は、審議会等の長が当該審議会等に諮って決定するものとする。」とあるので、ご協力いただきたい。

谷委員長

公開になると市民の方が傍聴する権利が守られるということになる。公開または非公開について皆さんどうでしょうか。

公開ということによろしいか。

各委員

同意

東畑主査

この委員会は公開させていただくということで皆さんよろしくお願いします。〈以下資料2、

7 ページ参照) 同指針第 5 章第 13 項「公開の方法」に基づき、「当会議の傍聴を希望するものに傍聴を認めることにより行う」とあるので、資料 3 の傍聴要領(案)により、傍聴に関し必要な事項を定めさせていただきますのでお願いしたい。

井上課長

公開については、市では原則公開しており、議事録については要約筆記という方法でホームページと 1 階の情報センターで公開ということになる。

谷委員長

案件 3 について、会議の内容、議題をどれくらい前から如何なる方法で公開するのか。

東畑主査

情報担当には十分な確認はとれていないが、ホームページ等により事前に周知させていただく。

谷委員長

案件 4 について、この委員会をどのように展開させていくのかが、今日の一番重要な部分になる。本委員会が果たす役割を明確にする必要があると川上委員、白井委員から発言があった。それは私も含めて、事務局に問われている問題である。〈議事録(資料 4)の 7 ページ参照〉私たちが審議する前に井上課長から市の想い、今までの流れを踏まえて、事務局としてのビジョンをお話しいただきたい。

井上課長

この推進委員会については、この前に策定されました「文化振興計画」に記されており、そこには「計画の推進、進捗状況のチェック、評価・アドバイスをを行う」と記されている。この委員会の役割については、このたび、事務局の設置場所が変更になったからといって変わるところはない。また、この計画の中で「社会情勢や施策の成果への評価も踏まえ、さらに、市民文化活動の成熟に合わせ、柔軟かつ適切に見直しを行うこととする。おおむね 3 年から 5 年ごとに見直す必要があるかどうか検討する」ということも書かれている。この見直す状況としては、大きくはやはり、社会・経済的情勢の変化がある。リーマンショックや東日本大震災などにより、地方自治体はなお一層財政状況が厳しいものとなるだろうと考えられる。また、計画自体を見直すにはすぐにはできないので、その準備期間も含めてそろそろ見直す時期であると考えている。よってこの推進委員会の役割としては、「振興計画の策定」ということをこの度付加させていただきたい。また、その役割を付加することでこの推進委員会が機能面からも効果、効率的であると考えている。見直しにあたって、財政難の今日においては、創設等新たなものを作り出すのではなくて、市民を主役として「既存」あるいは「再構築」をキーワードとして、既存の施設、あるいは組織、団体、市内のアーティストなど有効的資源を活かしながら、それらの資源と、その文化を求めている市民等、コーディネート機能を強化しながら情報発信していかないといけない

と考えている。まず、見直しに当たっては、市内の資源の把握、把握できるシステム、どのように把握していくのかということから考えていただきたい。そして、これらをどう発信していくのか、どう繋げていくのかというのが次の課題である。このような土台があって初めて、文化振興計画も河内長野らしい計画となっていくのではないかと考えている。現在も文化振興計画の中で進めていっているが、計画自体はやはり他市と何らかわりのない計画となっており、こういった土台に基づいて河内長野らしさを出していけたらと考えているので、まず資源の把握等から進めていただいて、そして、それがやがて計画に結び付けられたら非常にありがたいと考えている。

谷委員長

今までの復習の意味も込めて、今後の本委員会のあり方についてお話しさせていただく。その上で、また皆様に意見をいただければと思う。

河内長野市文化振興計画は平成 18 年度から 27 年度までの 10 年間ということでこの冊子は謳っている。この計画に基づいて何かが大きく推進したという実感はないものの、既存の文化施設では創意工夫を重ね、より魅力的な活動をおこなっているところもある。しかし、この計画を策定した以上、新しい視点から、アプローチを試みる大切であると思うのであるが、ほとんど、新しい取り組みがなされていないということも事実である。それをふまえ、前任者の嶋田委員長が中心となり、24 回の議論の中で、アーティストセンターの必要性を挙げられた。それは文化振興計画に書いてある「アーティストのための創造の場づくり」や「交流・コミュニケーションの場づくり」ということを具体的に提案したということになる。そして、副市長級の文化振興を専門にする役割を担う人物を配置するというような内容を委員会の総意として提言した。しかし、それらは残念ながら、財政的な問題で厳しいと判断された。市に提言をする際には、予算規模やアーティストセンターの特性、仕組み等、極めて分かりやすい文章で説明する必要があったと思われる。提言書というものは理念を書くことが基本ではあるが、最後に資料というかたちで、具体的なプランをまとめることで、誤解を招くことなく、より一層、理解を促すことができたのではなかったか。

次に委員会の役割を考えたいので、次の展望について、お話ししたい。

委員会の役割として、計画の進行管理を行うだけでなく、計画の推進、進捗状況のチェック、アドバイス、本計画の見直しと書かれている。私が委員長に就任したときに、評価システムの構築を目的に掲げたいと事務局より説明されたが、振興計画に基づいた新たな文化振興の具体的なアクションが起きていないのに評価というのは勇み足ではないかということ市や河内長野市文化振興財団の担当者に伝えたところご理解していただいた経緯がある。

<資料>

「計画の評価・必要に応じて計画自体の見直しを行います」の部分について、これは、文脈的に言うと計画通りにいかないとき直ちに評価を経て見直しをおこなうというのがスタンダードな読解だと思うが、具体的にこの計画を立てたにもかかわらず、何一つ新しさが出ていないので評価はできない。例えば、文化振興策の方向と具体策の「現代的な芸術によ

る河内長野の再発見」や、「公共空間をアートな空間に」についても議論されていない。寺ヶ池には有名なアーティストが創った作品が多くあるが、買って設置するだけで有効利用されていない。「子供たちに文化との出会いを」というところについても、新しい視点で議論はされていない。まずは、著名な写真家や一流の文筆家が河内長野と向き合い、作品に結晶化させている事例を調べることで河内長野市に住んでよかったという気持ちを漲らせることから始めたいと考える。

私は具体的に前進・変化させることこそが大切であると思う。企画運営を具体的に実行するのは市民を含めた実行委員会を組織し、進めていくスタイルが筋である。当委員会は実戦部隊ではなく、優先順位をつけ、市民を巻き込むかたちで、多くの人々と一緒に議論していく場をつくることである。委員長に就任してから河内長野の主な文化施設を見学し、そこで働く方々の生の意見を聞いてきた。当たり前のもので存在しているものをもう一度違う角度から見ることで、井上課長が言う既存の施設を再構築するという事に繋がってくるのではないかと考えている。この資料に書かれていることをしっかりと考え、実現可能なプランを立てることが重要である。

「河内長野らしさの視点」については、街づくりとしての文化というところで、地域資源を発見し活かすとある。私は、市民とともに河内長野の地域資源を発見する調査隊をつくり、様々な場所を訪れるとともにキーマンと言える人に会い、河内長野のすばらしさをひとつの成果にまとめることが重要ではないかと考えている。それを冊子、展覧会、講演会、ワークショップ等に複合的に展開させることで、河内長野市の豊かさを市民のみならず、多くの人々に紹介したいと思う。

どんなことを企画するにしても河内長野らしさを打ち出し、しっかりとした基盤を築かなくてはならない。そのためにはまず河内長野と向き合わなくてはならない。どのようにすれば市民がそのメンバーに加わってくれるのか、既存の文化団体や大学、短期大学、小学校・中学校、高校の先生方をどう連携させていくか。本当に動く組織をつくるにはどうすればいいか、どのような資源を調査するのか等を審議する必要があるだろう。その拠点として、機能させるアーティストセンターの存在意義を再び考える必要もあるだろう。成功の秘訣は心からやりたい、自発的にかかわりたい人々を集めるかにかかっている。幸い河内長野は文化財も多く、複数の文化施設もある。また、市内には短期大学もあるし、隣接する大学も存在する。そして、何よりも輝いている市民が多く住んでいることが強みだろう。

これを実現させるためには財源が必要になるが、まずは、8月に来年度予算について、事務局であるふるさと文化課が財政担当部局と折衝するため、それなりの書類が必要となる。次の委員会は8月末に開催するため、間に合わないが、今日の話聞いてアイデアがある場合は意見を頂きたいと思う。私と事務局で把握しておいて、後に委員会で固めたいと考える。きっちりと基盤を固めつつ、何から始めたらいいいのか、何をどのように計画すればよいのか、そして来年の4月から新しい予算で実行できるようにしたいと考える。

魚返委員

どんな方向へ進んだらいいのか初めて筋道が見えてきた気がする。「河内長野物語」に目を通し、もっと河内長野に誇りを持たなくてはならないと感じた。できるだけ多くの人に浸透させていただきたい。

谷委員長

この本には古い写真が多く使われていて、例えば、写真を集めるということについても単に集めて終わりではなく、大きく変わったところ、おもしろいところなどを年配の方に取材するなど市民が主役にならざるを得ないシステムを作りたい。そういう意味では一世帯に一冊あるというのはいいことだとは思いますが、原価的に厳しいのではないかと。

井上課長

ご指摘の本も含め、様々な本を市内の書店などにご協力いただき、積極的に販売させていただいている。

萬木館長

「河内長野物語」については、新聞で紹介されているのを見てすぐに買いに行ったが、売り切れていた。市民の方が関心をもっておられるということをうれしく感じた。

谷委員長

この本が面白いのは執筆を委託していないところであり、また、委託しなくても本を書くことができるほど河内長野には資源が多くあり、人材も豊富であるということでもある。

松村委員

このたびの震災を受けて、もし河内長野で起きたとき、心を一つにできるようなものをつくることはできないだろうか。そのひとつとしてアーティストセンターがあげられるのではないかと。

谷委員長

河内長野の文化資源の一つとしてアーティストというものがある。その層は厚い方だと思う。しかし、大阪市内へ出ていく人が多いのが現状ではないだろうか。ひとりひとりのネットワークを使うことで発掘していくことが河内長野の資産にもなる。

小西委員

キックスで行われた市美協展を観たがもっと盛り上がる方法はないだろうかと思った。

谷委員長

それぞれがもっと横の繋がりを活かすべきだ。帰属意識が強すぎる。ディレクターが共通認識をもっておもしろいことをしようということガイダンスしなくてはならない。しかし、それはものすごい抵抗にあうのではないだろうか。本当にみんなが納得してくれるよ

うな良いテーマであればできるかもしれないが相当な努力が必要であろう。
システム作りを審議していかなくてはならない。

寶楽委員

この会議に一番望むことは半年先までもよいので見通しを立てていただきたいと考える。それがわかっているならば、グループワークなどで委員同士が話し合っ、もっとひとりひとりの発言を重要視することができるのではないか。それを、会議を構成し、アシストするファシリテーター、聞き役がまとめて共有するといったような一人一人の資源が活用される進め方にすればもっとよい委員会になると思う。もう一つは、見直すにしても河内長野市の調査をしなくてはならないというのはわかるが、河内長野市の文化の地域課題は何なのかということピックアップして共有し見直すことも重要ではないか。豊かな資源を活かし、河内長野らしさを出していくためには調査よりも発信が大切なのではないか。どちらに進むかを定めるべきである。

また、「河内長野の文化がいいな」「河内長野物語がいいな」と思っても、かみ砕く場所がないのが問題である。地域の文化を守るためには市役所もしくは市役所から委託されたこの委員会が中心となっていくのではなく、企業や市民から寄付が集まる仕組みを作る必要があるのではないか。今後人口が減って税収が減るのは確実なのだから、地域資源を大事にしていく調査のほうが大事だと思っている。

谷委員長

お金に関しては何も市役所だけに頼っているわけではない。企業や市民から調達をしていく重要性は承知している。

寶楽委員

民間の力をもっと活用するべきである。

ワークショップを作るにしても何をやるにしても市民が主体というのはすごく難しい。世界民族音楽祭の取り組みをして気づいたのが、人のつながりがないと来てくれないということ。

谷委員長

委員会をどのように運営していくのかという見通しはすごく大きな宿題であり、具体的に進めていくための、計画の立案は確かに必要であると思う。自分の街のことを知るために、まずはリサーチからはじめることが大切ではないか。それも単なるリサーチではなく、クリエイティビティに富んだリサーチのあり方を検討することが重要である。

寶楽委員の話にあったが、調査と発信を別々に考えるやり方もあるが、調査即発信という一体化もかんがえられるのではないか。しかし、一人ですと色が出すぎてしまうので、ディスカッションの場を設けるべきと考える。

寶楽委員

ディスカッションの場を設けるのは重要である。そうすれば個人の色も出すぎることなく、多様性が生まれる。

文化振興計画でワークショップのような方策をとる場合は、市民が中心となってやるべきである。文化振興計画の団体は、河内長野にはこんな光があるよと絶えず投げかける役割だと思っている。

川上委員

ものを創る側の人間を育てるというのも重要だし、ネットワークを作るということも重要であるが、より重要なのはオーディエンスをどれだけ増やせるかということである。つまり、市民に翻訳・変換をしてあげる役割をする人が必要である。人間というのは評価価値を持つとすることで、価値基準がどこにあるのかということをも市民に提供しなくてはならない。文化はなくても生活はできるが、心が豊かにならない。創る側、参加する側、その両方の立場を持てるのがこの委員会だと思う。2か月に1回会議があるなら、委員全員が次の委員会までに自分は河内長野のこんないいところを見た、こんな文化活動を見てきた、聞いたというのを発表していく。実行委員会形式にする、しないに関わらず、各委員が評価基準を持つことが必要であると思う。ものを創る側の人間、観ている側の人間、それぞれの立場で言えるのが我々であり、臨機応変に変化しながら、今は観客、今はディレクター、今はキャストというような形で文化に接する。そして自分の中で評価を作って、相手に伝える。その伝える機会がないなら機会を作ることにも力を注ぐことが必要ではないだろうか。

寶楽委員

文化の担い手というのは少しずつ育成されていっているように思う。鑑賞する人もいる。楽しみ方がわからない素人と、本質を極めすぎてシンプルにやっている人をどうつないでいくか、どう見せてかみ砕いていくかという人間の育成というのがこの振興計画にとってすごく大事なことであると思っている。そういう意味ではここに集っているみなさんの中に何かあるかという情報を共有することが必要不可欠。

川上委員

情報を多くの人に語っていかなくてはならない。それをしっかりとした形にしてくれるのがクリエイターだったり、それを専門にしている人たちだったりすると思う。子供たちにも自分のまちをふりかえったり考えたりすることができるようにしていきたいし、文化というのは市民によって作られていくのだからその人たちがどういう考え方をしているのかをお互い確認しておかないといけない。

谷委員長

この委員会もより活力を持てるように立場を超えて認めるところは認めるという形でやっていくことが大切だと思っている。

山田委員

ぐるっとまちじゅう博物館のイベントなど、いろいろな先進的な実践はされている。もっとどんな事例があるのかを知りたい。イベントに様々な思いで関わっている人がいて、立場を変えて他と関わってみると広がっていくと思う。

南委員

河内長野市には美術館がなく、文化に出会う機会をつくるという意味ではラブリーホールのロビーをギャラリーにすることはできないだろうか。

萬木館長

発想は素晴らしいと思うが、空調等の問題がある。それらを乗り越えられる方法があれば一緒に知恵をだしてやっていきたい。

寶楽委員

空いている民家をアートセンターとして活用するとか、公共空間を利用するという話があるが、そういった活用できる場所はラブリーホール以外にもあると思う。そこの良さも含めてもっと発散していかなくてはいけないと思う。ここで具体的なことを決めたとしても、私たちがチームを組んで実行することはできない。ただ、せっかくだいい意見がたくさんあるのだから、そういったアイデアをもっと交換すべきだ。

魚返委員

河内長野駅のエレベーターから改札口へとつながる通路や労働会館や滝畑の廃校跡などに絵画などを展示することに利用できないだろうか。

寶楽委員

商店街やカフェ、バーなどの一角に置き、最終地点としてラブリーホールのレストランに置き、アートフェスタというような形にするのはどうか。

川上委員

アイデアを投げっぱなしにするのではなく手立てまで考えて投げないと形になっていかない。

谷委員長

多くの市民が参加できるくろまる塾がスタートし、この動向に注目している。本委員会でも審議する内容もこれに連動させるあり方が考えられるだろう。

次回開催予定

平成 23 年 8 月 27 日（土）ふるさと歴史学習館、滝畑ふるさと文化財の森センターにて開催予定。